

第5章

近年の博物館を取り巻く状況と 「子どもとつくる博物館」事業



水展 中項目パネル

今、地球の水は、

- ・世界人口の五分之一、約12億人が安全な水が得られません。
- ・毎年300～400万人の人が水に関連した病気で死亡し、しかもその多くが乳幼児です。
- ・世界の人口増、経済発展、生活レベルの向上に伴い、世界の水資源取水量は1995年の3800km³から、2025年には4300～5200km³にまで増大すると推測されています。

(世界水ビジョン)

第5章 近年の博物館を取り巻く状況と 「子どもとつくる博物館」事業

1. はじめに

今回実施した「子どもとつくる博物館事業」は、平成16年、17年の文部科学省社会教育活性化21世紀プランの一つと位置づけられ、多くの方々との協働事業、特に博物館と学校の博学連携のモデル研究という面で大きな成果をあげることができた。当館としては、この事業を、博物館の社会的貢献の充実をはかる新たな取り組みとして力をそそいできたが、今回の成果は館職員と一体となって活動していただいた多くの方々のご支援の賜にほかならない。

自然・文化の資料・専門性を担う研究施設であり、また地域の社会教育を担う施設としての博物館であるが、日本の博物館は今、社会の経済・財政事情や即物的価値観に大きく翻弄されている。特に国公立博物館にあっては、予算・人員の削減を前提にした組織・運営の見直しや市場化テスト、さらに統廃合から市町村移譲や指定管理者制度の導入等あらゆる合理化対策の検討が進められている。そのようななか、2005年11月におこなわれた日本博物館協会の第53回全国博物館大会では、全体テーマとして「市民とともに創る博物館」が掲げられた。これは、今回の私たちの「子どもとつくる博物館」事業の拡大版と言えるもので、私たちが実施してきた取り組みは、我が国の博物館における大きな流れの先駆けとしての役割も大きいと考える。

2. 「市民とともに創る博物館」の方向性

「市民とともに創る博物館」を全体テーマとして開催された第53回全国博物館大会は、

全国各地から約400名が参加して、2005年11月に東京都江戸東京博物館で開催された。この大会では、各地の博物館での友の会、ボランティア、NPOとの地域連携の取り組み事例が多数紹介され、市民とつくる博物館についての今後の具体的な事業展開の有り様についてはパネルディスカッションや意見交換が活発におこなわれた。

そのなかで特に印象的だったのは、文部科学省の社会教育行政の代表が述べた今後の博物館活動の方向性についてであった。「博物館に求められる機能として、地域課題の解決に果たす役割が重要であり、この地域課題の具体例としては、自然・文化の保護・保全のほか、まちづくりや観光がある」と述べたのである。まさに、教育関係者にありがちな「上から下へ教え諭す」と言った姿ではなく、自然や文化にかかわる資料と専門性を糧にして市民と同じ目線で、共に働き地域社会を下支えしていく役割に他ならない。

このような状況は、博物館そのものの存在が、単に資料を収集・収蔵し、展示する場所ではなく、様々な社会や地域の課題とその対応のために市民とともに価値観や行動を共有する機能体としての博物館の運営の充実が求められているのである。

このような博物館を取り巻く状況に対し、千葉県立中央博物館では平成16年度に「県民、社会と協働する中央博物館」を柱とする事業中期目標をまとめ実施しているところである。

3. 「子どもとつくる博物館」の取り組み

今回実施した「子どもとつくる博物館」は、子どもたちの豊かな学びを支援するために、小学校と連携し、身近な素材である水を教材とする学習事業を、子どもの参画を得て企画、実施した。この事業では、水の性質やその重要性について、多くのボランティアの方々の協力をいただきながら共に学び、その成果を更に多くの人々に伝えるため、企画展「ワクワクたいけん 2005 旅する地球の水」を企画・開催できた。

この事業では、子どもの教育にかかわる効果はもちろん、博物館の運営の面でも、次の3つの視点から、先進的な研究成果をあげることができた。

子どもの学びのための情報の精選と効果的伝達

市民との協働による展示の制作および解説

水を素材とする効果的な環境教育

これらの成果は、当館の博物館活動の今後の運営の充実に資することはもちろん、全ての博物館の活動の新たな方向性の先駆けの研究事例として活用されるであろう。

4. 展示を目標とする協働

博物館は、様々な資料や調査研究の成果を社会に還元する手法として展示をもつ。今回の事業では、子どもの学びとこれを支援するボランティアの方々の活動の成果を展示と言う手法を用い、それぞれの目的を明確に共有化できたことが大きな成果につながった一つの要因と考えられる。

博物館の展示は、博物館職員が制作・管理することが常識とされてきた。ある意味ではこれは博物館特有の情報発信手法であり、当然、館職員が自分たちで完結させるものであるとの意識が強かった。しかし、それはややもすると枠にはまってしまい、利用者の側に立てないものになってしまう傾向も否定でき

ない。市民の豊かな発想や強い情熱に基づく展示は、常に展示に接している我々よりも新鮮で生き生きとしたものになる可能性が大きいのである。

子ども・市民・専門家および博物館職員など多様な年齢・経験の人々が協働する場合、博物館の展示は、その力を結集させる大きな原動力となるのである。

5. おわりに

私たちが子どもだった頃、家の近くでの豊かな里山海の体験はあたりまえであった。しかし、現在の子どもの取り巻く状況は、人工物に覆われ、情報過多で危険も多いストレス環境ではないかと思う。野山で思い切り遊び、多くの経験と学びのできる場、時間、そして一緒に遊べる仲間を確保してあげることは我々おとなの最低限の責務と思うのである。

今回の事業に参画しご協力頂いた方々に深く感謝申し上げるとともに、この成果を博物館の運営に活かし、子どもたちが思いっきり遊べ、また学べる状況をしっかりとつくりしていくことに、今後ともご支援頂ければと思います。

(中村 俊彦)

《コラム》 博物館に行ってみよう！

ちば河川交流会 榎村 光雄
(社会教育活性化推進委員会)

魅力的な中央博物館になるための一助になるならばという思いで、「社会教育活性化推進委員会」の委員になり、何回か委員会に出席し、水展ボランティアにも参加した。

委員会では専門的な事項が議論されたが、博物館や学校教育には専門外の者としての印象は、委員会・事務局は視界不良・着地点不明・準備不足ということであった。この印象は「水展」開催中にも感ぜられた。

ところが、驚いたことにこのような企画（連携、制作途中評価、ボランティアの組織化等）は中央博物館にとって初めてとのことで、視界不良・着地点不明・準備不足は無理からぬことと思った。そのことを前提にすると、それぞれの段階（委員会、事務局、プレ展、評価、水展、関連イベント、ボランティア等）で議論をし、合意形成がなされ、その過程で改良が加えられ、なかなかの成り果てであった。若い参加者がこの「企画展」を評して「進化する水展」と表現していたが、この表現はプラス思考で好ましいことである。

今後は、これらの成果を中央博物館の中にデータとして閉じ込め保存するのではなく、中央博物館の企画・運営に反映させてゆく必要がある。

いくつか思いつくままに改善案を記述すれば

博 連携を進める

博産連携：産業界との連携は、産業界にとってイメージアップに繋がることを強調し、博物館に興味を持つ産業界人を見つけ出し、財政支援を求める。

博農連携、博魚連携、博林連携、气象台・・・

現地（出前）博物館の開設

中央博物館の建物を使用した展示物のみが博物館ではない。現地での実物解説（動植物、地学）、ホームページを活用した解説や案内を実施する。

博物館OBによるボランティア組織を設立する。

博物館OBは現役時代には実現できなかった博物館に対する夢や改善案を抱いている。また、高齢化社会が進む中OBの豊富な経験と時間を利用しない手はない。OBを組織化することにより、孫も客となる。

あの子どもたちの生き生きとした表情が、中央博物館の中から広く県民に伝わっていくことを願っている。